

令和元年6月18日現在

機関番号：24102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12210

研究課題名(和文) 認知症高齢者と看護職の関係形成に活用するケアリングモデルの開発

研究課題名(英文) Developing a cooperative caring model for nurses and elderly people with dementia

研究代表者

小松 美砂 (Komatsu, Misa)

三重県立看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00362335

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、認知症高齢者と看護職者間の関係形成に活用するケアリングモデルの開発である。研究参加者は2014年度の6日間の認知症ケア看護師養成研修を修了した10名の看護職者であり、6名にフォーカスグループインタビュー、4名に個別の半構造的面接を行った。

この結果をふまえ、認知症高齢者と看護職者のケアリングの関係性を理解するための37の質問項目を抽出した。認知症高齢者と看護職者の関係形成には、それぞれの状況や他者との関係性が影響していた。また、互いの行為を通して互いに変化するという相補的な関係性が生じていた。これらの結果から認知症高齢者と看護職者の関係形成に活用するケアリングモデルを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究結果として示したケアリングモデルは、認知症高齢者が他者をケアする能動的な存在であることを中心に示したモデルであるため、独自の着眼点を有しており、学術的意義があると考えられる。

また、認知症高齢者は記憶障害という疾患の特徴から、一般的に関わりが困難で、受動的な存在と捉えられる傾向があるため、本研究結果は認知症ケアにおけるケア提供者の困難感の軽減や、認知症高齢者自身の生活の質の向上につながるということが期待できるという点で社会的意義もあると思われる。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to developing a cooperative caring model for nurses and elderly people with dementia. Participants were 10 nurses who completed a 6-day dementia care nursing training offered in 2014. A focus group interview was conducted with six participants, and individual semi-structured interviews were conducted with four participants.

From these results, 37 question items were created to understand the caring relationship between elderly dementia patients and nurses. Conditions of nurses, conditions of elderly people with dementia, and their relationships with others affected the formation of a relationship between nurses and elderly people with dementia, which demonstrated a cooperative caring relationship in which both parties changed through the other's actions. These results showed that caring model between elderly people with dementia and nurses were characterized by cooperative actions.

研究分野：老年看護学

キーワード：高齢者 認知症 ケアリング 看護職者

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

日本の認知症者数は2012年に約462万人であり、2025年には700万人を超え、65歳以上の5人に1人が認知症に罹患すると予測されている。そのため、認知症高齢者にやさしい地域づくりに向け、新オレンジプランをはじめ様々な国家戦略が策定されている。認知症は認知機能が持続的に障害されることにより社会生活に支障が生じるため、病院、高齢者施設、地域と様々な場において、ケア提供者は認知症高齢者への対応に困難を感じている現状がある。

認知症高齢者のケアを困難で終わらせず、より良いケアを提供するためには、認知症高齢者と看護職者の関係性をどのように構築するかが重要となる。認知症高齢者との関係性を構築するためには、看護職者は効果的なコミュニケーションを行う必要があるが(Kilgore,2015)、認知症ケアにおいて看護職者が感じる困難の一つがコミュニケーション障害であり、両者の信頼関係の構築を難しくする要因となっていることが示されている(千田他,2014)。また、対応が困難な症状を呈する認知症高齢者とのコミュニケーション法を学ぶための看護師用のe-learning教材も開発されている(青柳他,2017)。

しかし、看護職者のコミュニケーション力を高めるだけでは、看護職者側からの一方的な働きかけに留まる危険性があり、認知症高齢者と双方向の関係性が構築されるとは限らない。そこで、本研究では認知症高齢者と看護職者の関係性を双方向からとらえるために、ケアリングに着目した。ケアリングとは、ケアリングをケアする人・ケアされる人に生じる変化とともに、双方が成長発達をとげる関係性を示している(Mayeroff,1971)。また、ケアリングにおいては、ケアする人とケアされる人の関係性を、ケアされる人が認識していることが重要であるといわれている(Noddings,1997)。

認知症高齢者が看護職者をケアする存在であったとしても、その事実看護職者が気づいていなければケアリングは成立しない。本研究チームは先行研究において、看護職者は多忙な勤務の中で認知症ケアの難しさを感じながらも、認知症ケアにやりがいや達成感を感じ、ケアを通して認知症高齢者から得る体験をしていたことを明らかにした(小松ら,2017)。この研究結果をふまえ、本研究では認知症高齢者と看護職者との間に双方向の関係性が生じていることを明らかにし、認知症高齢者と看護職者の関係性を形成するためのケアリングモデルを示す。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認知症高齢者と看護職者間のケアリングの関係を明らかにし、認知症高齢者と看護職者間のケアリングモデルを開発することである。

本研究において認知症高齢者とは、アルツハイマー型・脳血管性・レビー小体型などの病型を問わず、認知症と医学的に診断されている65歳以上の高齢者とする。

3. 研究の方法

1) 方法

第一段階の調査として、2014年度にA大学で実施した6日間の認知症ケア看護師養成研修を修了した10名の看護職者を研究参加者とインタビュー調査を行った。研究参加者が修了した研修の内容とは、認知症に関する病態や看護、認知症に関する医療福祉制度、看護倫理などの講義と、口腔ケアや排泄ケアなど認知症者への援助の演習であった。研究参加者6名にフォーカスグループインタビューを行い、4名は個別に半構造的面接を行った。

インタビューは研究参加者の許可を得た上でICレコーダに録音し、逐語録を作成した。インタビューガイドとしては、認知症ケア場面における認知症高齢者と看護職者の相互関係について感じていることなどの質問を設定した。データ収集期間は2017年2月から7月でありインタビュー時間は合計230分であった。データ分析には質的帰納的方法を用いた。最初にフォーカスグループインタビューのデータから、認知症高齢者と看護職者の関係について語られた内容をコード化し、サブカテゴリ・カテゴリを生成した。次に、フォーカスグループインタビューの分析結果をふまえ4名に個別インタビューを行い、得られたデータから再度サブカテゴリ・カテゴリを検討した。

また、第二段階の調査として、インタビュー結果から認知症高齢者とナースのケアリング関係を理解するための質問として37項目を抽出した。それらの質問項目により作成した調査票を2018年2月から3月に、一般病棟・回復期病棟・療養病棟・地域包括ケア病棟・緩和ケア病棟・認知症疾患病棟に勤務する1445名の看護師に配布し、アンケート調査を実施した。その結果、876名の回答を得て(回収率60.6%)、有効回答788人について分析を行った。

2) 倫理的配慮

本研究は所属大学の研究倫理審査会の承認を得て実施した。研究参加への同意の手続きとして、研究参加の候補者に研究目的と研究内容、倫理的配慮などを記載した書類を郵送した。書面には研究への参加・不参加は自由意思であることや同意を撤回する権利、個人情報保護、研究結果を研究目的以外に使用しないこと等についても記載した。次に、インタビューを受ける意思がある看護職者から連絡をもらい、インタビューの場所と時間を調整した。インタビュー実施前には改めて研究概要や倫理的配慮について口頭で説明し書面により同意を得た。アンケート調査については、調査票の返送をもって調査に同意を得たこととした。

4. 研究成果

1) 第一段階：インタビュー調査

研究参加者 10 名は、女性 9 名・男性 1 名、平均年齢 50.8(±7.0)歳、看護師 8 名・保健師 2 名であった。看護職としての平均経験年数は 23.8(±11.4)年であり、3 名が認知症ケア専門士の資格を有していた。インタビュー時の所属施設は一般病棟 3 名、回復期リハビリテーション病棟 2 名、精神科病棟 1 名、高齢者施設 3 名、地域包括支援センター 1 名であった(表 1)。

【表 1】 研究参加者の概要

研究参加者	性別	年齢	職種	現在の職種での 経験年数*
A	女性	49	看護師	28
B	女性	56	看護師	35
C	男性	42	看護師	7
D	女性	50	保健師	20
E	女性	55	看護師	34
F	女性	62	看護師	40
G	女性	47	看護師	25
H	女性	47	看護師	24
I	女性	41	看護師	20
J	女性	59	保健師	5

* 経験年数の月単位分は四捨五入した

分析の結果、8 カテゴリと 40 サブカテゴリが明らかになったため、以下カテゴリを【 】、サブカテゴリを< >で示す。

カテゴリ【認知症高齢者との関係形成に影響する看護者の行為】は、<認知症高齢者にゆっくり優しく声をかける><認知症高齢者に笑顔で接する><認知症高齢者と視線を合わせて話しかける><認知症高齢者の興味のある話をきっかけに会話をすすめる><認知症高齢者の気持ちを考えて穏やかに接する><認知症高齢者が興奮している場合は時間を置いてから再度接する><認知症高齢者が環境になじめるよう工夫する><認知症高齢者の感情面を大切にする>の 8 サブカテゴリより生成した。

看護職者の行為の背景要因であるカテゴリ【看護職者の状況】は、<認知症に関する知識が不足している><認知症高齢者への理解が不足している><職場には認知症高齢者を軽視するような雰囲気がある><認知症高齢者のケアは時間がかかるため後回しにしている><看護職者の気持ちに余裕がなく焦りを感じている><忙しい時に看護職者は認知症高齢者への声かけや対応がきつくなりがちである>の 6 サブカテゴリより生成した。

同様に、看護職者の行為の背景要因であるカテゴリ【看護職者と他者との関係】は、<認知症看護に関して他の看護職者と情報共有することができる><認知症看護に関して看護職者以外のスタッフ(医師・薬剤師・療法士等)と情報共有することができる><認知症高齢者の家族からの感謝の言葉がある><看護職者の支援により認知症高齢者の家族が納得して意思決定を行うことができる><看護職者の支援により認知症高齢者の家族が在宅ケアをやり遂げることができる>の 5 サブカテゴリより生成した。

カテゴリ【看護職者との関係形成につながる認知症高齢者の行為】は、<看護職者の話を拒絶せず聞き受け入れる><ケアされることに対して「申し訳ない」「何かお礼をしたい」など看護職者にねぎらいの言葉をかける><「食事は食べないのか」「寒くないか」など看護職者に心遣いをする>の 3 サブカテゴリより生成した。

認知症高齢者の行為の背景要因であるカテゴリ【認知症高齢者の状況】は、<認知症高齢者の不安が大きい><認知症高齢者の身体状況が悪化している><認知症高齢者の帰宅願望が強い>の 3 サブカテゴリより生成した。

同様に認知症高齢者の行為の背景要因であるカテゴリ【認知症高齢者と他者との関係】は、<認知症高齢者から他の患者への気遣いがある><他の患者から認知症高齢者への気遣いがある><認知症高齢者との患者との会話が弾む>の 3 サブカテゴリより生成した。

カテゴリ【看護職者との関係形成による認知症高齢者の変化】は、<認知症高齢者が嬉しそうに笑顔になる><安定し落ち着いた状態が継続する><生活の場が慣れ親しんだ環境になる><関係形成ができた看護職者がそばにいと安心するようになる><関係形成ができた看護職者を認識し他の看護師よりも頼りするようになる>の 5 サブカテゴリより生成した。

カテゴリ【認知症高齢者との関係形成による看護職者の変化】は、<認知症高齢者との関わりを通して癒されたと感じる><認知症者との関わりを通して学びを得る><認知症ケアにやりがいや達成感を感じるようになる><認知症高齢者に受け入れられていると感じることにより仕事への意欲がわく><自分の言動を振り返ることができ自信や自己成長につながる><認知症高齢者との関わりにより得たことを仕事以外の自己の日常生活にも

生かすことができる>< 認知症高齢者との関わりを通して得たことにより看護職を長く続けていくことができる>の7サブカテゴリより生成した。

これらの結果から、認知症高齢者と看護職者の関係形成には、それぞれの状況や、他者との関係性が影響していることが明らかになった。また互いの行為を通して、互いが変化するという相補的なケアリングの関係性が生じていた。そのため、これらカテゴリの関係性よりモデル図を作成した。

2) 第二段階：アンケート調査・ケアリングモデルの作成

1)の結果より抽出した認知症高齢者と看護職者のケアリング関係を理解するための質問項目をもとにアンケート調査を行った結果は以下の通りである。

分析対象となった788名の平均年齢は38.36±12.2歳であり、男性40名(5.1%)・女性746名(94.7%)であった。職種は看護師712名(90.4%)・准看護師64名(8.1%)であり、実務経験年数は14.4±11.1年、認知症看護の実践を行っている年数は7.4±6.9年であった。看護に関する最終学歴は80.2%が専門学校であり、85.5%が正規職員として雇用されていた。現在の職位はスタッフが88.5%、副師長等が9.4%であった。現在所属している職場は、一般病棟67.0% 回復期リハビリテーション病棟7.7% 認知症ケア病棟7.0% 地域包括ケア病棟6.7%、療養病棟4.2%、緩和ケア病棟4.1%、その他2.4%であった。

認知症看護に関する研修については、院内研修が“ある”と回答した割合は68.1%、院外研修が“ある”と回答した割合は72.5%と半数以上であった。しかし、認知症看護に関するカンファレンスを定期的に行っていると回答した割合は31.2%と少なく、過去5年間に認知症看護に関する院外の研修を受けた割合は23.2%であった。

4件法のリッカート尺度による37項目について、最尤法・プロマックス回転で因子分析を行った結果、25項目4因子が抽出された。クロンバック係数は第一因子7項目.90、第二因子6項目.85、第三因子6項目.85、第4因子6項目.86、25項目全体は.92であった。さらに確証的因子分析により探索的因子分析で得られた仮設モデルの適合度を確認したところ、GFI.87・AGFI.84・RMSEA.07であり、信頼性・妥当性は概ね良好であったため、この4因子構造のモデルを本研究の最終結果である『認知症高齢者と看護職者間の相補的なケアリングモデル』とした。今後は本研究で開発したケアリングモデルの具体的な活用について検討していきたい。

<引用文献>

- Kilgore, C.: Improving communication when caring for acutely ill patients with dementia. *Nursing Older People*, 27(4):35-38 (2015).
- 千田睦美,水野敏子:認知症高齢者を看護する看護師が感じる困難の分析.岩手県立大学看護学部紀要, 16:11-17(2014)
- 青柳寿弥,竹内登美子:認知症高齢者とのコミュニケーション法」のe-Learning教材の開発.日本看護研究学会雑誌,40(2):151-161(2017)
- Mayeroff M: On caring. Harper&Row, Publishers, Inc., New York, 1971(田村真,向野宣之訳:ケアの本質 生きることの意味(初版),185,ゆみる出版,東京,1987)
- Noddigs N.: Caring. A feminine approach to ethics & moral education. The Regents of the University of California, 1984(立山善康,林泰成,清水重樹他:ケアリング 倫理と道徳の教育-女性の観点から(初版),93-123,晃洋書房,京都,1997)
- 小松美砂,田端真,早川正祐,宮崎つた子,大西範和:認知症ケア看護師養成研修を修了した看護職者のケア体験の分析,日本認知症ケア学会,16(2),498-506,2017

5 . 主な発表論文等

[学会発表](計2件)

小松美砂,早川正祐,大西範和,田端真,竹村和誠,宮崎つた子:認知症高齢者と看護職者の関係形成に活用するケアリングモデル開発のための基礎的研究.日本老年看護学会第23回学術集会,2018

Misa Komatsu, Seisuke Hayakawa, Norikazu Ohnishi, Kazunari Takemura, Makoto Tabata, Ritsuko Shimizu, Tsutako Miyazaki: Creating a Questionnaire to Understand the Dynamics of Caring Relationships Between Elderly Dementia Patients and Nurses, *Aging & Society: Eighth Interdisciplinary Conference*, 2018

6 . 研究組織

(1)研究分担者

氏名:大西 範和(Norikazu Ohnishi)

所属研究機関名:三重県立看護大学

部局名:看護学部

職名:教授

研究者番号:20176952

氏名:田端 真(Makoto Tabata)

所属研究機関名:三重県立看護大学

部局名：看護学部
職名：助教
研究者番号：20746359
氏名：宮崎 つた子 (Tsutako Miyazaki)
所属研究機関名：三重県立看護大学
部局名：看護学部
職名：教授
研究者番号：30314115
氏名：早川 正祐 (Seisuke Hayakawa)
所属研究機関名：東京大学・大学院
部局名：人文社会系研究科 (文学部)
職名：特任准教授
研究者番号：60587765
氏名：竹村 和誠 (Kazunari Takemura)
所属研究機関名：三重県立看護大学
部局名：看護学部
職名：助手
研究者番号：90779951
氏名：清水 律子 (Ritsuko Shimizu)
所属研究機関名：三重県立看護大学
部局名：看護学部
職名：講師
研究者番号：70593515

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。